

## 6. 神奈川県公立高校入試の動向

「神奈川 公立高校入試結果『自己表現検査』実施校 敬遠されず」

学校教育支援調査会 松田 邦道 氏

## 神奈川 公立高校入試結果

### 「自己表現検査」実施校 敬遠されず

県内公立中卒業予定者数は 68,702 名(前年比 410 名減)、高校等進学希望者数は 66,113 名(同 685 名減)となる中、県内外私立と通信制の希望者が増えた。

今年の神奈川県公立高校入試状況は概ね次の通り。

### 科・コースの新設、再編、定員変更、入試内容の変更

全日制公立高校の募集定員は中高一貫校の市立川崎と市立南の内部進学者を除いて昨年より 216 名減の 43,077 名になった。科・コースの新設では横浜国際に国際バカロレアコース、吉田島に生活科学科が新設された。普通科では生田、弥栄など 7 校が定員を 1 クラス拡大、鎌倉、横須賀など 15 校が 1 クラス削減。また、入試の内容、学力検査・調査書・面接の比率などを変更した高校があったほか、学力向上進学重点校に指定されている横浜翠嵐、柏陽、湘南、厚木と、同エントリー校の中から希望ヶ丘、横須賀、平塚江南の 3 校が、県作成の共通の自己表現問題を実施した。「論理的思考力・判断力・表現力・情報活用能力」を見る出題で、共通問題と共通選択問題から構成、共通問題は 7 校で同じ問題、共通選択問題はあらかじめ複数用意された大問から、学校が選んで実施した。このほか横浜緑ヶ丘、横浜国際、横浜サイエンスフロンティアなどが独自問題で実施している。

### 普通科 人気校は固定化

年 度	応募者数トップ 10 普通科					
	2019 年度		2018 年度		2017 年度	
1	横浜翠嵐	758	横浜翠嵐	777	横浜翠嵐	719
2	湘南	617	湘南	548	市ヶ尾	570
3	市ヶ尾	550	新羽	521	元石川	553
4	生田	537	荏田	512	海老名	544
5	住吉	530	多摩	502	住吉	534
6	希望ヶ丘	528	希望ヶ丘	499	大船	520
7	七里ガ浜	515	港北	491	川和	511
8	海老名	510	七里ガ浜	487	七里ガ浜	498
9	市立桜丘	498	市ヶ尾	485	荏田	496
10	横浜緑ヶ丘	492	川和	483	霧が丘	495

志願変更後の最終応募者数は 50,887 名で応募倍率 1.19 倍と、一昨年、昨年に続いて今年も 0.01 倍下がった。上の表は単位制や昼間部定時制を含み、学力検査のないクリエイティブスクールを除いた普通科の応募者数トップ 10 である。

トップは今年も横浜翠嵐で、2013 年からの現行の入試制度ではずっとトップを続けている。同校は隔年的に応募者が増減していたが、増減の幅は小さくなってきた。2 位も昨年と同じ湘南で、一昨年は 11 位で登場しなかった。昨年、今年と応募者が大きく増えている。3 位の市ヶ尾は応募者が大きく増えた。4 位は 2013 年以来初登場の生田だ。昨年、今年と急速に人気が上がっていて今年はトップ 10 に入った。5 位の住吉は隔年現象で、今年も応募者が増加している。6 位の希望ヶ丘も隔年現象の学校で、今年は減る順番だったが実際には増えた。7 位以下の七里ガ浜、海老名、市立桜丘、横浜緑ヶ丘もトップ 10 の常連で、表に登場しない年でも 20 位までに入っていることが多い。このように、一部を除いて人気校は固定化傾向だ。「一部」とは、今年も生田、昨年なら港北、一昨年なら荏田や霧が丘で、旧横浜東部・北部、川崎北部の学区の学校で年により人気が動いている。

年 度	応募倍率トップ 10 普通科					
	2019 年度		2018 年度		2017 年度	
1	横浜翠嵐	2.12	横浜翠嵐	2.17	横浜翠嵐	2.01
2	横浜緑ヶ丘	1.77	多摩	1.81	新城	1.78
3	湘南	1.72	横浜緑ヶ丘	1.64	多摩	1.63
4	多摩	1.70	新城	1.56	横浜緑ヶ丘	1.612
5	光陵	1.62	湘南	1.53	川和	1.607
6	市立桜丘	1.57	光陵	1.53	元石川	1.54
7	横浜平沼	1.503	川和	1.52	柏陽	1.53
8	市立東	1.500	大和	1.47	大和	1.500
9	市立金沢	1.497	市立高津	1.46	市立桜丘	1.497
10	住吉	1.48	市立戸塚	1.45	市立金沢	1.497

応募倍率も見てみよう。上の表で昨年の 5、6 位、一昨年の 9、10 位は全くの同倍率だ。また、今年の 10 位は住吉だが県の発表では市立橋、希望ヶ丘、柏陽も 1.48 倍である。小数第 3 位以下で差が出るため、ここでは住吉を単独 10 位とした。同様に一昨年は市立東も県の発表では 1.5 倍だったが、小数第 4 位に差があり、ここでは市立桜丘と市立金沢を同倍率の 9 位としている。

今年も横浜翠嵐がトップ、2 位は毎年 1 つずつ順位を上げている横浜緑ヶ丘、湘南は昨年の 5 位から 3 位に上がった。細かい倍率の上下はあるが人気校は固定化傾向で、トップ 10 は毎年や隔年で登場する常連校が中心だ。現行制度になって今年初登場したのは 7 位の横浜平沼と 10 位の住吉だ。両校とも、もともと比較的高い人気の学校だが、今年はその人気

がさらに上がっての登場だ。ところで、昨年はトップ10に登場していた新城、川和、大和、市立高津、市立戸塚は、今年は登場していない。新城、川和、大和は登場しないまでも高倍率で、今年も高い人気だが、市立高津と市立戸塚は応募者が減った。一昨年、昨年と人気の上昇が続いてトップ10に登場していたが、高倍率で受験生が敬遠したようで、一気に倍率は下がっている。

2019年度の太字の学校は「自己表現検査」の実施校。そのうち問題を共通化した「自己表現検査」を行ったのは学力向上進学重点校4校（横浜翠嵐、柏陽、湘南、厚木）と学力向上進学重点エントリー校3校（希望ヶ丘、横須賀、平塚江南）。このうち3校が上位に来ている。横浜緑ヶ丘は独自の「自己表現検査」を行っている（このほか神奈川総合国際文化コース、横浜市立横浜サイエンスフロンティア、横浜国際の国際バカロレアコースなどでも実施）。2020年は17校が共通問題と共通選択問題で「自己表現検査」を実施するので、上位校を狙うためには「自己表現検査」対策を避けては通れなくなる。

地域的には2017年も2018年も10校中7校を旧横浜東部・北部、旧川崎北部・南部の学校が占めていたが、2019年は4校に激減している。

## 専門学科・コースや総合学科は変動が大きい

専門学科・コースや総合学科等は、定員が小規模なものも多く、応募者数だと登場校が固定化するので応募倍率のみの比較とする。下の表の通り。

年度	応募倍率トップ10 コース制・専門学科・総合学科								
	2019年度			2018年度			2017年度		
1	市立横浜商	国際学	2.09	市立橘	国際	1.85	市立橘	国際	1.92
2	神奈川総合	個性化	1.90	上矢部	美術	1.79	市立橘	スポーツ	1.67
3	市立横浜商	Sマゼメント	1.872	市立横浜商	Sマゼメント	1.74	市立戸塚	音楽	1.64
4	神奈川総合	国際文化	1.865	川崎総科	情報工学	1.67	Sフロンティア	理数	1.55
5	弥栄	美術	1.72	神奈川総合	国際文化	1.62	中央農業	畜産科学	1.513
6	川崎総科	デザイン	1.56	Sフロンティア	理数	1.60	白山	美術	1.436
7	川崎総科	電子機械	1.54	川崎総科	建設工学	1.59	鶴見総合	総合	1.427
8	市立戸塚	音楽	1.46	横浜国際	国際	1.53	みなと総合	総合	1.42
9	みなと総合	総合	1.44	相原	畜産科学	1.51	川崎総科	科学	1.41
10	川崎総科	情報工学	1.41	川崎総科	電子機械	1.51	弥栄	スポーツ科学	1.41

小規模な定員が多い分変動も大きく、3年連続で登場している学校・課程はない。今年市立横浜商業・国際学が2倍を超える高倍率でトップだが、昨年、一昨年は登場していない。2014・15年はトップで、一旦は高倍率が敬遠されたものの、人気が戻ってきた。5位

の弥栄・美術も同じケース、2位の神奈川県総合・個性化は昨年11位で、人気校の中の人気上昇となった。3位の市立横浜商業・スポーツマネジメント、4位の神奈川県総合・国際文化、7位の川崎総合科学・電子機械、10位の同校・情報工学も昨年とあまり変わらない人気だ。8位の市立戸塚・音楽と9位のみなと総合は隔年現象で、今年は応募者が増えた。6位の川崎総合科学・デザインは初登場である。

昨年は川崎総合科学が3つの学科でトップ10に入ったことが注目された。それも普通科カラーが強い科学科ではなく、工業色が強い学科となる。今年は建設工学に代わってデザインが登場している。2013年に現行の制度になる前の後期選抜では、こうした職業色が強い専門学科もトップ10によく登場していたが、制度改革の2013年こそ職業系が目立ったものの、2014年以降理数や国際といった普通科系や芸術・スポーツ系、あるいは総合学科が中心になり、職業系はせいぜい1校登場するだけになった。一昨年の表では中央農業だけである。しかし、昨年から川崎総合科学が登場するようになり、代わって総合学科は倍率低下が目立ってきた。同時に受験生の私立志向が上がっているため、連動した動きだ。ただ、職業系が登場するようになったといっても川崎総合科学だけで、職業系が全般的に人気上昇、というわけではない。新しい動向としては、川崎総合科学高校情報工学科が登場しているなど、社会でIT人材が求められていることを反映して、情報系の学科の倍率が上昇していることが挙げられる（他県でも同様な動きがみられる）。

## 応募の取り消し・学力検査の欠席・取り消し

全日制では志願先変更時に12名が応募を取り消し、変更後の取り消し・欠席は410名、受検後取り消しは328名で、いずれも昨年より減っている。志願変更後の取り消し・欠席の割合も0.8%で僅かだが昨年より下がっている。私立志向が高くなって、公立か私立か迷いながら受検するケースが減ったのだろう。応募の取り消しや欠席の最多は今年も横浜翠嵐で99名と突出して多く、湘南26名、多摩23名、生田22名、川和21名、サイエンスフロンティア・柏陽・市ヶ尾各19名、元石川17名、厚木16名、大和15名などとなっている。有名私立が第一志望の受験生が、希望校に合格したための取り消しや欠席である。

帰国枠や連携枠を除いた全日制の定員割れは34校43学科・コースで計615名に昇った。普通科では津久井71名、寒川45名、横浜旭陵41名、永谷27名やクリエイティブスクールの田奈55名、総合学科の麻生総合20名など、専門学科では小田原城北工業・電気23名、市立幸・ビジネス教養22名、磯子工業・化学21名などが目立っている。昨年よりもさらに「入りやすい普通科系の公立高校」の人气が下がり、専門学科でも小学科に分かれていない学校などで定員割れが多い。神奈川県だけでなく、他都県に共通する現象であろう。

